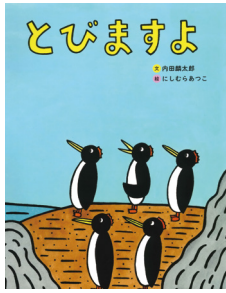


# 読んでみたい本 児童文学評論家・藤田のぼる

## 絵本

『とびますよ』  
(内田麟太郎・文、にしむらあつこ・絵、アリス館)

「とびますよ とびますよ ほらほら そらをとびますよ」と、まるで呪文のような軽快な言葉で始まる、この絵本。小鳥が空を飛び回るのを、ぶたがうらやましそうに見上げています。こうなれば、次のページでは、もちろん……。こうして、ことばと絵に誘われるように、いろんなものが飛び上がります。次になにが飛んで、それからどうなるのか。ページをめくるごとにドキドキできる、絵本の醍醐味満点の一冊です。(低学年から、1300円+税)



『とってもなまえのおおいネコ』  
(ケイティ・ハーネット作、松川真弓・訳、評論社)

はなさき通りの家々を渡り歩く1匹きのネコ。グリーンさん宅ではアーチーと呼ばれ朝ごはんをもらい、ホスキズ夫妻の家ではオリバーと呼ばれ、お茶をいただく。家ごとにいろんなことをして、いろんな名前と呼ばれます。ネコが姿を見せなくなり、みんながやっと見つけたのは、この通りでただ一軒ネコが行かなかったはずの、一人暮らしのマレーさんのお宅でした。ネコが主人公のようで、この通り自体が、そしてそこに住む人たちが主人公のような、ほほえましい世界です。(低・中学年から、1400円+税)



ちょっとユーモラスで味わい深いストーリーです。(低・中学年向き、1300円+税)

『消えた時間割』  
(西村友里・作、大庭賢哉・絵、学研プラス)

真子や明日香の4年生のクラスの池田先生は、毎週金曜日に翌週の詳しい学習予定を載せたプリントを配ります。ところが先週の金曜日、ロッカーの上にあった墨汁が配る前の予定表に垂れてしまって、何人かは黒いシミのついたプリントを受け取ることになりました。真子は、月曜日の持ち物の「絵の具」のところに、明日香は木曜日の「地図」というところに墨汁が垂れたのですが、本当に絵の具や地図を使わないことになったのです。この話を耳にした子たちにも同様のことが起こるのですが、この墨汁は妙法寺の前で拾われたもので、実はこの寺には墨汁に関わる言い伝えがあるのです。ちょっとした不思議がまるで墨汁のシミが広がるようにじわじわと広がっていくプロセスにリアリティがあり、さまざまなドラマが生まれていきます。(中・高学年向き、1300円+税)



足を踏み入れることはありません。ここは別名「おぼけ団地」とも呼ばれていますが、実はまだにぎわっていた頃からのいろいろなわさがあったのでした。新番地に住む結衣が久しぶりに旧番地に「探検」に行き、不思議な子どもたちと出会う第一話「おくりっこ」、子ども時代をここで送り、小学校の先生として戻ってきた里村先生が、かつての思い出と出会う「黒マントの男」など、5話からなるオムニバス風な構成になっています。時間の記憶が「物語」になっていくプロセスを目の当たりにするようで、この作品は大人にも子どもにも読んでほしいと思いました。(高学年以上向き、1400円+税)

『わたしの空と五・七・五』(森莖こみち・作、山田和明・絵、講談社)

中学に入学したものの、クラスでなかなか友だちができず、部活の選択にも迷う空良(そら)。下駄箱に入っていたチラシに誘われて文芸部の部室に行ってみると、3年生が二人だけで廃部の危機。先に1年生の小林静香が入部していましたが、空良は踏み切れません。さらに入部者を増やそうと、句会が計画され、空良も無理矢理3点の俳句を作ることになります。近年流行りの「部活もの」なのですが、空良や他の子たちの心の風景と、彼らが作る俳句とが実にマッチしていて、3年生による講評も含めて、俳句を作ったり、読まれたりするドキドキ感がストレートに伝わってきます。テレビの某番組で、芸能人の作る俳句への切れの良い評が話題になっていますが、あえてその中学生版といっても、この作品は許してくれそうです。(1400円+税)



『めしくわぬにようぼう』  
(常光徹・文、飯野和好・絵、童心社)

飯をくわない女房ならほしい、と思うけちでよくばりな男のもとに、「飯はいらないから家においてくれ」とやってきた美しい娘。確かに一口も食べませんが、なぜか家の米が減っていきます。不審に思い、仕事に出るふりをしてそとのぞいてみると……。おなじみの民話が、飯野和好さんの絵で新たな命を吹き込まれました。怖い、おもしろい、おかしい、怖い……。5月の節句の由来話という結末ですが、そうした枠組みを越えて、読む者のさまざまな感情をひきださずにはおかない、存在感抜群の絵本です。(低・中学年から、1300円+税)



## 低・中学年向け

『コクルおばあさんとネコ』  
(フィリパ・ピアス作、前田美恵子・訳、徳間書店)

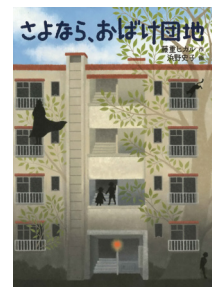
これもネコの話。こちらはコクルおばあさんと暮している黒ねこのピーター。コクルおばあさんはロンドンの町の風船売りで、高い高い家の最上階に住んでいます。部屋の天井にはね窓があり、そこから屋根に上がって町を眺めるのが、コクルおばあさんもピーターも大好きでした。ところが、悪天候が続き、生の魚を食べられなくなったピーターは家出をします。心配のあまりやせてしまったおばあさんは、風船を持ったまま風に吹き飛ばされて、思いがけない冒険に。『トムは真夜中の庭で』などの作者の、



## 高学年・中学生向け

『さよなら、おぼけ団地』(藤重ヒカル・作、浜野史子・絵、福音館書店)

老朽化や高齢化などの問題に直面している団地も少なくないようですが、この作品の舞台の桜が谷団地も、すでに取り壊しが決まっています。特に「旧番地」と呼ばれる奥側の三十棟は、とっくに無人となっていて、新番地の住人もあまり



## クツワが文具アイデアを募集 ／7月31日必着

協賛会社のクツワ(ベルマーク番号55)が、「100年後も愛される文具」のアイデアを募集しています。

今年で7回目。クツワ商品をもとに、事務用品や学童文具、特に子どもの学用品を「進化」させるアイデアを募っています。「斬新で機能やデザインに優れ、付加価値がある」「商品化の可能性ある」を基準に社内審査し、大賞1点に10万円分の商品券、優秀賞と入賞作品にも図書カードを贈呈します。過去には「転がすえんぴつ」「一皮むけて、成長するマグネット筆入」などのアイデアが大賞を受賞。第3回の優秀賞「最後まで使いたくなる鉛筆」は2年前に「駅名えんぴつ」として商品化されました。

7月31日必着。要領と応募用紙はクツワのHPをご覧ください。発表は10月1日。親子や友人などグループでの応募も歓迎。問い合わせは同社サービスセンター(06・6745・5611)へ。



## ファミマ「ありがとうの手紙コンテスト2018」

今年で10年目、10月1日締切

協賛会社のファミリーマート(ベルマーク番号23)による「ありがとうの手紙コンテスト」の募集が今年も始まりました。2009年から実施しており、今年で10年目を迎えます。

小学生を対象に、普段なかなか言えない「ありがとう」という感謝の気持ちを、言葉で伝える手紙を書いてもらいます。審査員長はジャーナリストの池上彰さん。作品は一人1点、オリジナルの未発表作品に限ります。10月1日締め切り(消印有効)。全国を7ブロックに分け、低学年・中学年・高学年の3部門で「最優秀作品賞」21人などを選び、図書カードを贈ります。発表は12月中旬。詳しくは同社HPで。問い合わせは0120-611260へ。



## 「ベルマーク便りコンクール」 作品を募集／9月30日締切

第33回ベルマーク便りコンクールの作品を募集します。学校・幼稚園などから、家庭や子どもたち、地域の人たちに向けた、ベルマークの収集や活動への協力を呼びかけるお知らせや新聞、広報紙をお送りください。

【応募方法】特集号や冊子なども含め、過去1年以内(2017年10月1日～2018年9月30日)に制作されたものが対象です。サイズや、カラーか白黒かは問いません。年間の活動状況がわかるように、なるべく多くの作品をお送りください。肖像権や著作権上で問題となる可能性がある内容については審査の対象外となる場合があります。1面題字下にある財団住所の「ベルマーク便りコンクール係」あてにお送りください。締め切りは9月30日(消印有効)。

【賞金と参加賞】優秀賞10点に各3万円と副賞として額入り表彰状、佳作10点と特別賞には各1万円と額入り表彰状を贈呈します。受賞しなかった応募団体にも、参加賞として2000円の図書カードを贈ります。11月に財団ホームページで入賞校を発表します。